

松尾でございます。よろしくお願いいたします。

ロータリークラブ例会というのは初めてでございます、こういう場でこういうことをやっておられるのかということがやっとわかりました。黒岩会長のお話では、とにかく女性が増えなければいけないという課題を抱えていらっしゃるようなので、ここで私がカタイ話をすると女性が入ってこなくなるのかなという感じがいたしました。

私は今ご紹介いただきましたように大学教育論のほうで、出身はドイツ文学とか哲学ですので、どう考えても女性が増えるようなテーマにはなりにくそうです。なおかつ今日は新宿という大都会にやってまいりましたが、ふだんは山の奥に住んでおり、狸とか狐とか皆さん見たことがあるかどうかわかりませんが、イタチなども本物がおります。人間の数よりも猪の数が多いというような所からやってまいりました。

今日、何故こんな場にやって来てしまったのかと申しますと、実は私の研究仲間、広島大学客員研究員の同期だった方がいらっしゃいまして、清水畏三先生、桜美林学園名誉学園長で日本のハーバード研究の第一人者でございます。今は隠居して研究成果をまとめて国会図書館に寄附したいとおっしゃる。せっかく研究したので皆様の役に立つように1冊だけ作ろうと今まで調べたことを本にしました。ところがいざ作って見ましたら印刷会社の社長が「先生、1冊作るのも300冊作るのもほとんど値段が同じですけど」と言われました。

そこで清水先生は考えまして、値段がほとんど変わらないなら300冊にしましょうということになったのですが、問題は残りの299冊をどうするか。奥様からも本を整理しているのに本が増えたとお叱りを受けたそうです。それでは先生、私も結構顔が広いのでお配りしましょう、ということで贈呈者リストを作り、全国の研究者仲間に郵送しました。それでも配りきれませんので新宿でもお願いしたのですが、そのときに黒岩会長にお願いしたところ、6冊は配っていただきました。まだいっぱい残っていたところ、噂が噂を呼んでアルカディア市ヶ谷私学会館に清水畏三先生をお招きしてお話を伺おうということになり、私が企画しました。

そうしましたらその企画文が6000人に行ったものですから一気に有名になりまして、今度は本がたった299冊しか最初からない、大変だ。日本に大学は770はあるんです。短大まで含めるともっといっぱいある。その中で僅かに299冊しか存在しない本だったものですから読みたいくても読めない。売っていない。だったら売ればいいじゃないと皆さんお思いになるかもしれませんが、清水先生というのは桜美林の経営者でしたので、世界の大学を歴訪されて経営者同士の、互いに忌憚のない意見交換をしているのです。そうすると本音の話になりますので、ちょっと出版ははばかれる。自費出版で友達に読んでもらうのはいいけれど、これを公にすることはできないと。結局私が個人的な人脈で299冊を何とかご検討いただいたという経緯がございました。

ちょっとだけこの内容についてお話させていただくと、ハーバード大学の学長職務というのは日本の学長と全然違って、仕事は寄付金を集めることです。第二に優秀な教授をスカウトすることです。寄付金の額も兆ですから東大がいくら頑張っても予算規模が違いますから話にならない、勝負にならないという事情がある。東大も知恵を絞っているいろいろな改革案を出していますが、実は種本というのはこれなのです。これを議論してこういうふうにしよう。そういう事情がございますのでじっくり読むとすごく面白い本です。

ロータリークラブが拡大する時にはどうしても必要なノウハウが入っているとも思いますが、市販ができないという事情があります。もしご関心のある方は黒岩会長が持っていらっしゃいます。コピーの方は清水先生から許可が出ておりまして、松尾がいくらコピーして使っても構わないと全権を委ねられております。コピーして検討するのは全然問題はないということになっているのです。

ハーバード大学の話で長引いていますが、この『列伝風ハーバード大学史』という本は「北京大学史」と抱き合わせになっています。後ろのほうは「北京大学史」なんです。中国の研究者は「北京大学史」が読みたくて清水先生におねだりしてこの本を手に入れる。「北京大学史」を読むと、その前に何かへんなものが付いているということで「ハーバード大学史」を読むと、これはすごい本だということになるのです。逆に「ハーバード大学史」の方を読みたいと思う人は、後ろに何か変なものが付いている。「北京大学史」だ、ということで今度は「北京大学史」を発見するというかたちに構成がなっています。

今、日本の大学は「タイタニック号」と言われており、どんどん沈没しているのです。そうすると、西に北京大学、東にハーバード大学で水槽をイメージしていただくと、その水槽の中で逆転すればいいわけで沈没を浮上に変えればいい。この本はすごくよくできている本です。内容は日本の教育者には想像を絶するようなところがあり、学長選なども卒業生に推薦依頼状を30万通以上も送るのです。とても面白い本ですので是非黒岩会長にお願いしてご検討いただけるとありがたいと思います。

ここまでは「ハーバード大学史」と黒岩会長とどうして知り合ったかというお話でしたが、その後、あちらに座っていらっしゃる園山俊彦さんと新宿スイングリープスオーケストラと出会いました。「新宿ビッグバンドジャズ保存会」というのを作ってビッグバンドを守ろう、そして新宿を明るくしようというお話があって、このロータリークラブが大いに活躍していると同っております。おそらく「歌舞伎町ルネッサンス」のお話の中でも話題にのぼっているのではないかと思います。

オリンピックを控えてテロとかいろいろな問題を考えますと、歌舞伎町が一番あやしいということもあるのでしょうか、以前警官を300人動員してぼったくりバーを排除したという経緯があって、歌舞伎町を安全で美しい街にしようというルネッサンスが始まっているのです。その中でジャズも入っていて、園山俊彦さんも活躍しているわけですが、私のような大学関係者が入ってまいりますと普通とは違う読み方、感じ方をしてしまいます。

私はルネッサンスと聞くとイタリア・ルネサンスの方に頭がいきますので「歌舞伎町ルネッサンス」とどういふような関係にあるのかなと考えてしまうわけです。そうしたら歌舞伎町の区役所通りに今、イルミネーションが点灯しておりますが、あのイルミネーションの基調が白なのです。実に歌舞伎町らしくない、質素な色合いのイルミネーションになっておりますが、何故かと言いますとこれはニューオリンズをイメージしているからなのだと思います。ニューオリンズも歓楽街でジャズ発祥の地だそうですが、やはり「歌舞伎町ルネッサンス」のようにニューオリンズルネッサンスがありました。そうするとジャズメンは職業を失ってしまうのです。だんだん仕事が無くなってしまい、流れて行ったところがボストンで、そこでジャズが流行って隆盛の時を迎えたという経緯があるのだそうです。

ですから「歌舞伎町ルネッサンス」と言ったときに、ジャズというのは極めて生き残りにくいジャンルになっているのではないかと私は思います。しかしそれではどうしようもないので、園山さんが頑張っておられるわけです。ここで手を打たないとどうにもならない。守るだけで攻めずに果たして守れるのか。いろいろ調べたり友達と話したりしているうちに面白いことを聞きました。

歌舞伎町というと「藤圭子」さんの「新宿の女」という歌がございますね。「ばかだなあ、ばかだなあ、だまされちゃって」という有名なフレーズがありますが、実は騙されたのは私達の方だったというのが最近わかったのです。どういふことかと言うとあの展開には、シナリオ、種本があったのです。「五木寛之」さんという有名な流行作家ですが、彼が「艶かしい歌」と書いて「艶歌」という小説を書いていて、それが話題になって売っていたのです。その小説の主人公どおりのことを「石坂まさを」と「藤圭子」さんが演じていたのです。それで「新宿の女」という歌を作って歌舞伎町を流して歩いていたのです。石坂さんが白いギターを弾いて、それにまんまと私達は乗せられちゃったと、そういうことがあるのだそうです。

もしこの手が歌舞伎町の音楽家が編み出した手法だとすれば、ジャズでも同じ手法が使えるのではないかと単純に考えることができるわけです。しかしジャズの場合、五木寛之さんの『艶歌』に相当するものが果たして存在するのかということですが、それが驚くべきことに存在するのです。ジャズを使って世界的な人間になった人がおりまして、意外ですがジャン＝ポール・サルトル。サルトルの『嘔吐』という小説はジャズを実にうまく使って、最初から最後までソフィー・タッカーの「Some of these days」というジャズを上手にを使って世界のサルトルになっているのです。

私は文学とか哲学の方の人間でしたがジャズを聴きませんでしたので、読んではいたのに《ジャズの力》というものに気がつかなかったのです。それに最近になって気がついたのですが、もし時間があればちょっと聞いていただきたいと思います。資料は印刷してまいりました。ジャズの力が働くと、どういうことが起こるかと言うと、ソフィー・タッカーのジャズを聞くと吐き気が止まるのです。吐き気。吐き気が止まるというのはすごいことです。

その吐き気というのは存在に疑問が生じ気がついたときに自分は存在しているのかどうか、此処は何処？私には誰？の世界に入って吐き気をもよおすのですが、それをジャズが止めてしまう、それが『嘔吐』というお話です。本当でしたらサルトルは『嘔吐』というタイトルにしたくなかったのです。もともとは『メランコリー』というタイトルで執筆していたのですが、出版社のほうでメランコリーじゃ売れないよということで、中に吐き気が出てくるのでタイトルを吐き気にしちゃったのです。ですからサルトルにとっては非常に不本意なタイトルですが、やっぱり出版社の方が「うわて」で、『嘔吐』というタイトルにしたがゆえに、サルトルは一気に世界のサルトルになったということがありました。

その吐き気を考えていくと、その行先には実存主義哲学が出てくるのは当然のこととして、私も学生時代読みましたけれど、《ジャズの力》に全く気がつかなかったという事情があるわけです。多分、読んでいる人で気がついた人というのはあまりいないのではないかという気がするんです。

そうすると先ほどの「藤圭子」さんと「石坂まさを」さんのケースを考えて、同じことをやると一体どういうことが起こるか。園山さんとスイングリーブスオーケストラは世界のジャズバンドになるのではないかということも考えられなくはないですね。何故かと言うとソフィー・タッカーの「Some of these days」という曲を私も聞きましたし、友達にも聞いてもらいましたが、全然趣味に合いません。今のジャズメンで演奏する人はまずいないだろうと思いますし、ソフィー・タッカーの曲を歌うジャズシンガーもまずいないと思います。歌舞伎町でそれを再現したらそのベースとしてサルトルの『嘔吐』があるのだということを前提とした場合、何が起こるかという実験ができるのではないかと思います。面白い話になっているのかどうかわかりませんが、用意してきたので曲をかけてもよいでしょうか。(拍手)

ソフィー・タッカーの「Some of these days」です。友達が聴いたら耳を塞いだというものです。サルトルそのものが聴いたバージョンがYouTubeにございます。1926年録音のColumbiaレコード版がそれではないかと思います。私は、これを200回は聴きましてタイムスリップしたような感動を味わっております。

これを上手にを使ってサルトルは世界のサルトルになった。これを聴いて吐き気が止まったということをございます。あとは吐き気につきましては少し補足させていただくと、タイトルがタイトルですし、吐き気問題についても考えておきますと、私の住んでいる山奥で「うざったい」という言葉が生まれて、我田引水で「うざったさ」でサルトルの小説のタイトルにもなるのですが、この多摩方言が生まれてじわじわと大都会東京に迫り、ひとたび東京に入るや、「どーん」と日本全国に広がった。

「うざってー！」と某女性歌手がテレビで叫びましたら、全国に広まりました。九州の方では「うざったかあ」と言うそうです。東京の山奥の方言が東京に入りますと、富士山の噴火のように全国に定着するというモデルが奇跡的に抽出された極めて珍しいケースなのですが、それが実証されている。「言語変化の雨傘モデル」といいます。英語にも適用できる価値の高い学問モデルだと思います。東京外語大学の井上史雄先生が発見しました。この言語学の学問モデルは《東京のど真ん中》歌舞伎町の力を図式化したものとも考えられますし、それと重ね

合わせると「うざったい」というのと「嘔吐」というので相殺ができます。学問的に言語学、人文学で補強することになりますから、《ジャズの力》は極大になるのではないかと考えております。

園山さんを大いにバックアップしようと思って考えたのですが、いかがだったでしょうか。黒岩会長はベンチャーズの方なので、ベンチャーズの応援も期待して、ベンチャーズから「さすらい慕情」を提供された深谷順子さんにソフィー・タッカーのジャズの可能性を検討していただいているところでもあります。以上でございます。どうもありがとうございました。

<閉会点鐘>

今日の松尾先生の講評は、園山さんをお願いしたいと思います。どうぞよろしく。

【園山会員】

どうも僭越ですが、松尾さんは「歌舞伎町ルネッサンス」のプロジェクトが起きたときから多分感じていらっやと思うのですね。僕はあのとき自分で企画書を書きまして、新宿区長に直訴して、この歌舞伎町を何とかいい街にしようじゃないか、昔のジャズがあふれる、音楽があふれる街にしようじゃないかということで一生懸命やりました。いろいろなところで許可を得て路上ライブとか展開しているときに、松尾さんがいつも私のそばにいてくれたような気がするのです。写真を撮ったり、いろいろと励ましてくれたり感謝しております。今日はありがとうございました。

【黒岩会長】

やはり松尾先生、園山会員、こういう方々がジャズに明るく、わがふるさと歌舞伎町・新宿区。これを明るい夢のある街・新宿に推進し出来上がることをお祈ります。今日は本当にありがとうございました。第34回目の例会を終了させていただきます。(終わり)